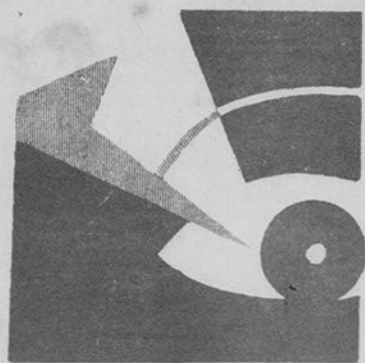
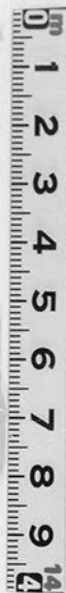


表現人

1928



號刊創



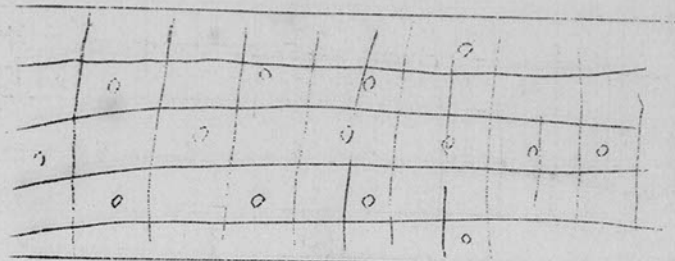
畫

觀

人

創刊号





創刊号 表現人

目次

清言紀行
時代感

野のなほある風景

詩

橋
おまへとわがは
林の酔い
気紛れな風景

篇

静かなる風景
草の街頭
題

松本純一

原健

高木清

島田柳江

佐原舜光

横田卓造

片寄取二

新妻寒

石田修二

馬場印一郎

短歌

香傷賦

俳

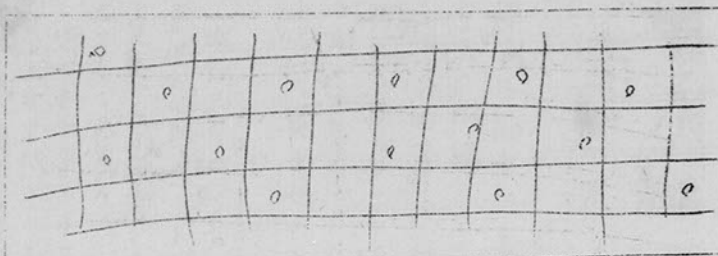
句

八島冬全
佐々木尾
南浜自眠
中村琴志
松浦十方
星野柳枝
馬場北葉

佐川満洲
石田修二
安藤幸宏
織内涼風
高木柳江
吉田雪心

文藝通信
後記其他

北葉。佐原。
馬場生
以上



草に座る

八木重士

(詩集「秋の瞳」より)

わたしのまぢがいたった
わたしのまぢがいたった
こうして草に座れば
水はそ水がわかる



時代感

原健

静かに訪れた、春の消楚な姿！
空気の肌、蝟りよい蝟感！
絶えが生子魅る春だ。枯木
の根の下からも、断崖のストンとストン
の間からも若いグリーンの芽が、若草
となって萌え始めた。

昭和三年の初春にこの本は静かに
真理の世界より生れ、諸君の愛と、泪と
憂鬱とを経緯して絶えざる詩文を織
ることであらう。

併し私は其の本の名も知らなければ又
プロレタリア詩や、ブルジョア詩や、も知ら
ない。唯、美しい感激の詩文を持つて綴
られてゐる詩の本であると思ふことを想像

して見るに過ぎない。

みにくい血みどろな、人の世の闘いを外
に咲く花を見て、自然と人生とは何
なる皮肉なコントラストをたしてゐるでせう
か。

我が国に於ける憲政史上、蓋時代的な
普選第一回の総選挙にあつて、私は如何
に無産黨が既成政黨と資本家の結合
による壓迫に對し奮戦して八名の當選者
を進出させたと云ふことは、時代の展開が
斯く得られたこと、無産民衆の政治的覺
醒が促進されたこと、少しく感じた
のである。

併し、政權爭奪を離れては政黨の存在が
ないと思ふことが實際の理誨で、無産黨と
しては、その政權掌握の野心より起つたと云
ふことは私が今更黙文を並べる迄もよく
奥に労働者階級、無産民衆の爲めに

戦ふといふ心情の発露によつて、無産黨が起心して立候補するやうになることは少ないだらうと云ふよりむしろ無いと断言することかできよう。

それより、表面的に民衆の前に偽言を吐くと云つた方が早いのかも知れない。

それだからこの光明か普選の影には、權利獲得に依る争闘もあるものが暗に渦を巻いている事が推定し得るであらう。

國會議員に當選するのは血と金！
を持つて戦わなければならぬか？！
私はそれを悲しむのである。

私は詩人でもなければ、創作家でも、又、藝術家でもない、思想家では無論

ない！

無理に云ふからは平内は無産者だ！
プロだからと云つて労働運動する者でも無ければ、又批判する者でもない。唯、読書家としても云わうか、その態度としてこの社会を冷静に見守つてゐよう。

一九二八、三、二四



山里のよあけ。

山村暮鳥

うるめる瞳に山なみ、
かふしゝ愛を研ぎいだせば

残る雪とこつとどころ
よみがへる空の光澤。

のそみにいらく手の上

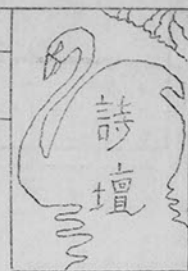
月は、白銀のいづき蒼とす、

全心全霊の鐘を打て、

刹那と刹那と、脆く、

あやしく相朶む。

(大正三年三月号詩歌より)



蛙のないてゐる風景。

松村清

とても霧深い夜更けを

俺ひとりだけににやへによき一歩かせた

いくたびか

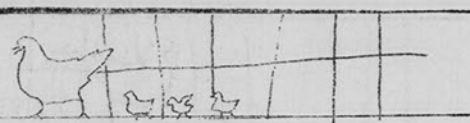
まづげに凝溜する霧をぬぐつた

俺ひとりだけの感覚をつゝはつて歩いた

歩いてゐる

俺自身の足立目ばかりに

むづむづしい快楽を^ほそめてゐた



めらめらと^爛となる霧の昇騰に
めつがちの月はぼとんと^おすんでゐる
匂つてくる肥しつ風のむせぼつたさに
搬さちらして滑転する蛙ら！

俺は唯、お——と呼んでゐた

作者へ（お寄稿下されたものを載せました。）

林 檜

高木 柳 江

くるつ くるつ

朝の陽射が朗らかな声で

挨拶を交す果實屋の店である



いま、若い女の手に
北国の愛くるしい乙女
素僕な若者の心臓が
次から次と誕生してゐる

荒療の詰った竹箱の中の

むさぐるしい冬眠から

こゝは目醒は彼女達

ひとつひとつ名布中に拭きとり氷では

店先に列べられた

なんと健かな北国の

若人達であらう

まだ雪深く埋づきもれてゐやう北国の

ルビーのやうな嬢ちゃん達よ

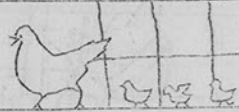


図 懐の春

島田丹光

かろひの日の

健元がたふかたふ

郷落の男なれば

あゝわれいくひ

去りし女への思慕にむせびし

ちろもちの色

空間に生殖すれど

われひとりの室に龍り

煙草を吸ひ

夏風を吐かんかな

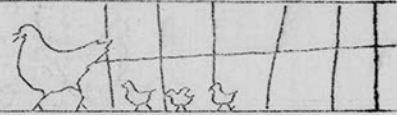
○夏風を吐かんかな

ホプラは蒼空をつくさし



明るい四月の空気を
細長いバットでバンドする
向ひの坂からこの空を地へ
鞠を抱へ風をすいて
ころど蒼ちてゐた子供達！

たちまち
蹴る、投げる、受ける、なぐる
自由と治る、四肢全身の躍り！
唯一個の球にあらゆるものをたこ込み！
無上の喜嬉、無上の愉快
球塊となつて空間を縦横に飛ぶ！
捨て処なき憂鬱を……こ、こ、こ！
わっぱと
鬼に切り大きくこの空気を丸飲み！



さみしい酔ひと水

横田卓造

サラー・サラー！
と真夜中の風が
そつと呼吸する
さみしい酔ひと水が行く
影が歩む
酔ひと水
酔ひと水
水が飲しければ水をぬらう
また、あの……
カクテルと女の味が
頭の隅っこにこびりついてゐるのか
フラフラ



駄目だよ 駄目だよ
 此れは化石した奴等なんだから
 永い間 暗い地球の底に埋もれた楽譜を
 今度——掘み出したって
 駄目なんだ

フラ フラ……

新しいと鬼うてみた

どろ水をかぶったやうな表情は

總べて古い反抗に過ぎないのだ

知らないのか

知らないのか

淋しい酔ひどれよ

組織と訓練とで成長した

海東のやうな自由が欲くはないのか

淋しい反抗はやめよ

俺達の悲しい酔ひどれよ！



おまへといふのは

佐藤 常雄

叩かれても

どうがれても

へばりつく

おまへは

強情といふものな

腹と交際って見ろ

解からあ

紅い舌で

ぺちぺち

嘗められて見たら

其曲った根情が



ぐにやぐにやして
終には溶けて仕舞あ

○ ニ 章

白

山峡の雪は
死んだ空に
蒼白かつた

○

夕

片割れ月が

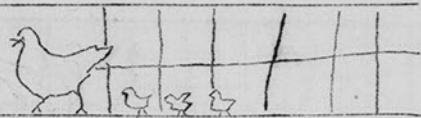
屋根の上で

とぼつてゐる

火事場帰りの

人
噫して

行つてしまつた



○ 気紛れな風景

片寄 歌 二

ゆかん 風景を

人間はみんな疲れて

気紛れに喚えてゐるんだ

田舎はくちやくちやに泥づいて

素暗らしい版畫のやうな

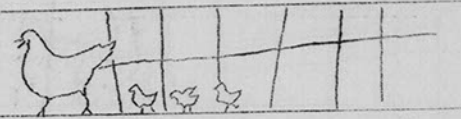
清雪が真白で 気紛れな風景

雀は生きてゐるんだね

○ 春

ころころ ころと

春が来るのだ

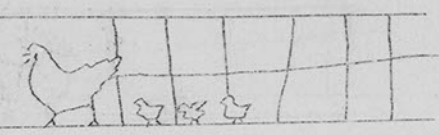


おれ生命刀を自買するんだ
処女は春の夕べ
みんな惨殺されたんだぞ

無題

新妻 寥

春雨の降る日
卒業も間近く
ひとり
書斎の机にもたれて
ありし日のことどもに
思ひ走らせてゐる
乙女！
乙女は泣いてゐた
しくしくと春雨のやうな



悲しさにて
あがずみつめてゐる
そのまなこは
いたいたしい程にたゞれ
はつくらとした頬には
ぬるぬるい色が
あらはれてゐた
学習室を出る乙女のころは悲し
まじかにかゝれる
春雨よりも淋しく
〇残るもの
机の奥に
淋しく残るは
彼女の便り
なにを秘めたるかと



そつと
今一度見れば
悲しなつかし
寥々さまと
美しい字のみ
淋しく残るは
彼女の便り
涙は冷めたく
願を傳ふ

田草の街頭

石田修二

誰からの笑ひこけてゐるそうを
と眞晝
もぐら奴の器用な耕作に



土の香りがしんと延びて
たんぼがしんなり居眠つてます
だつとした子供は
木の葉をみつめて
笑つてゐる
笑つてゐるよ

明・暗・×××

新の林から鮮かな芽です

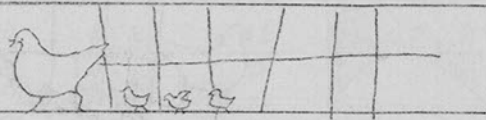
— 雲・山・畑・畑



静かなる風景

馬場印一郎

歩み疲れて
小丘に腰をおろせば
まんまるい裸山のてつぺんに
絶えず雲が湧きあがり
消えてゆくのをあがず見る
冷やかな山気を雲散わして
遠いながれの脈膊が肉を元
あ、人の子一通らぬ
山里の風景である



草刈共のかほそい痕跡がはいのびる
遙か丘の地平線に
雲のやうに湧きあがる里々達を
心待ちしふがう
もう、しばらくになる

○林檎に覗くある横顔。

紅い林檎だね
明るい光を集めた
無邪気な瞳だね
輝やかな健康美の禮讃！



乳色血にもられた
あるひとのき

遠憶

八木重吉

(秋の瞳より)

山の上には
烟があつたつけ
烟の隅はうづくまってみた空の
近かつたこと
恐しかつたこと



三月。

佐藤 舜 野

はざれさゆ轍のおとのみちのへに
たつ春うれてのどかなるかも

あかねさし湯谷の態のよろしきに
友笑みつゝもみとれをるかも

春の日のもろゝやかちくりんに
名しらぬ鳥のくゞりゆくかも

春傷賦 (口語歌)

片寄 歌二

青春の
白い基標に
はつきりと
厭らねばならぬ一つの思ひ

青春の夢は
逝くとして刻まれた
傷手はゆえぬ
——そは誰故

バタリ バタリ
引きつゝてゆく古靴が
若い生命を
埋没するのだ

電柱のかげにほえる
むくんだ

今夜の月が、馬鹿に
眞赤だ

公園を

うろついて居た、野良犬の
面が、なんだか

俺れに似てゐた

残飯の車を運ぶ

老い馬に

今朝もばったり

会つたさびしい

病犬が

鎖りづるづる引いて行く

深夜の路次だ

月がさびしい



俳句

八島冬全

並立の青さ名のみは春寒し

泥田また黒く余寒の日のたる

鳥影もさすや柳のうつる水

晝風色や芽張柳は雨を見る

○

佐川満寿莊

プロはプロ

同志で嘆く

あばら屋だ

死鬼の額に月影が射す

母と

一自居たつて、口利かぬ

淋しい癖と……

母に云はれた

いつのまに

淋しい癖がついたのか

十四の春を

迎いた頃から……



放牧の牛のさげんや春の竹

よめのせて渡す小舟や春の川

春の夜を女しらべるつみ哉

たりある屋敷の跡や草芽開る

河原まで石吹く風や猫柳

○

石田修二

柳ふと流る、夜の風見えて

うかぬ顔して夜桜の夜集る

芽生して明るき林歩みけり

花あべて紫多き、白皮うれし

と泉臺庚の椿に暮らて獨居哉

○ 南波白眠

寄せ包み特更目刺はひこりて
延び足らぬ手に試す崖の木葉哉
きてみれば只灯の町や春の宵月
廊女の目永を草履白ひも
奥付けば浮子に寄りくる蛙哉

○ 織内涼風

山吹やこゝに手洗ふ神の水

山石蟹のこちがり沈む春の海

網干せる帆船並んで春の海

嵩く杉苗馬車や雨の歌

櫻餅乾さしあんや峠茶屋

○ 吉田 雲心

春の水舟走るやう走りけり
足袋ぬきて冷新らし二月哉
踏み開く徑幾條や花の山
葉桜や山寺の書置静かなり
乳母のきて座よまた戻る雛祭

○ 佐々木 牛尾

詩に龍る庵の落葉のつらさ
其迄事寝むさう櫓のとうく火
芒野の立ちおくれたる鳥一羽
冬枯の地より見ゆる山の肌
秋風に穂を啄んで飛ぶ雀

○ 星野 柳枝

山門の灯明るき花の寺
窓白小葉烟いづこや闇の汽車

月ニ更橘満開塀越えて

知かに後足るわぐ春の風

霞なく木ニ小筑波も暮れは亮

○ 松浦 十方

泣く奥似もして児は遊び上筆哉
薰風やアーンと高く陽は光る
地にすれて花まばらなり風の秋
風の吹かおとろへし斜陽がたよ
海と空唯一碧や秋の声

○ 中村 琴志

下駄洗ふ程の川あり豆の花
土筆身にはさみて幼童かな
三味もる、垣根へたてし青蘆
葉のちりや幾日雨な夏木立
夕立や御殿ももりし村芝居

○ 安藤 幸宏

蹴鞠外れし柳の糸の亂れ哉
汽車に皆尻を向けてる田植哉

○ 唯黒々大煙突や朧 月

ビルディング列が道路の柳かな
種蒔や日本は貪し農の国

○ 高木 柳江

野晒の据風呂けがる春の雨
春日のうらゝ小鳥木末にちと居
綴子で路を友送りゆく日傘哉
歩道皆草む日の春ごゝろ
業終て菊の根分の薄つかれ

○ 馬場 北葉

春の蚊や野風呂にありし夕心
芽柳や家鴨追ひ込み舟に入る
げんげ野に子を呼ぶ声の暮れに鬼
山吹や水車に合つしとながれ
摘草や鶉の声する磧土午

短歌

佐藤 義家

こちはいの白蛇のどけをしむらたちの

葱咲くあたりに人畑うちてあり

皮さけてつぶたち花の咲きいづる

あうげもふかし霧はれそめて

まかげ子等の去りにしのは

葱坊主はもふみされはつこのこれり

はるなれば葱坊主の花もよし

東風吹くたびは紫の花はまうちみり

うれつゆを身にしあつめんこのごろの

萌草がろく風そよぐ朝赤





通信欄

○總ての文藝通信を募集
いたします。
○原稿は無制限です。

珠玉社例会

四月七日磐城炭磁珠玉社例会
磁業所魔接室に於て開催す。
○平路影社同人八島冬全
生田月秋月西氏出席す。
珠玉社同人出席者。

佐々木牛尾 石田修二
南波白眠 安藤森山
中村琴志 松浦十方
星野柳枝 馬場北葉
同欠席者

織内赤風 高木柳一

八島冬全先生選

席題 三句吐

達達五客

上京の兄送る日や蜘蛛

砂利共にすく上げたる蜘蛛

つゝまじう裾をまくりて蜘蛛

今朝も又同じ声ふり蜘蛛

夕浴びてあさりむく手の歌

冠吟三光

あさり買ふ龍をかすめて

地は遠浅のあさりかく娘の遠近

あさり賣り雨後の裏町通り

互選 櫻 三句吐

駒止めて谷の橋を仰ぎけり

散る花を被さる酔の痕跡

ぼんぼりの灯を見て居たり

上気して橋のけりたる茶の前

名利や老僧のソけし橋哉

膨らみて雨雲低き橋かふ

散り初めし橋並木や猿便

馬夷して橋の小路鐘暮る

又ヤラメルのが瀬も老う居て橋

松林に南枝はみ出て橋哉

盃に月の影置く橋かふ

花の道向ふべき人に問はれけり

戦捷の塔聳えけり橋かふ

漸くに碑文読み得て橋哉

土堤長く万葉の橋旭に

よき流れ抱えて橋味き茶え

歌詠みて吾懐しむ橋かふ

名水のありて橋の庄田舎

土堤三星曉て橋の花雲霞

夜橋や手を取らぬ女連

花に酔ふてあさり人なる男

互選 草餅 三句吐

鶯の宿に草餅賣られけり

山の湯へ蓬餅売る茶内火

蓬餅旅のひと日を降り込

雛祭終へてそりたる草の餅

草餅をちぎりし草の青月哉

娘を死おせ今日草餅を淋し

摘み草の餅となりたる娘

ふくれたる焼き草餅の青月

春の色染め出す音と蓬餅

名を示す里の土産や蓬餅

雛の灯の軽くゆるる草の餅

草餅や歯の美しき女連

草餅や屋並の低々水の郷

菱形は切り揃へけり草の餅

薄化粧する女といふ草の餅

草餅や上戸もつまむ豎の

たより

いろいろの草餅並ぶ寺の

書

草餅や温泉の遠山を窓

に見て

摘み寄せた蓬香ふや餅

の色

草餅の客に暗れけり隣り

山

朝風

浅刺

先生吟

朝風に五つ幾の香や刺汁

午後五時開会す。

(以上北葉記す)

園夜秋日へ。

詩南車第三巻第五号

六月号より、新装活版に

附すことになりました。

内容の革新と紙面の延

長は相俟つて諸君の讃同

を得るものと思存します。

一新した詩南車の他日諸

君に見ゆると云ふことは同

一団の思ふ、詩南車誕生

以来の努力の賜物で決し

て徒勞でなかつたのを知日

感するものであります。

諸君！諸君の寄稿を

歓迎いたします。読者

投稿下さい。寄稿規定

は来る五月一日発行の創

作号にありますからご覧

下さい。

各項規定は何れも編

輯上の必要に迫られて成

定いたしましたものであり

ますから、是々厳しく守

つて編輯子に便宜をお

興へ下さい。

詩南車同々 佐藤生

無珠玉社同々

安藤嘉山氏自今、幸宏

に改名。

後記 其の他

馬場生

希望

型式病。ペンディング病。

こうした病菌にとつ、かれないお

互の素つ裸な巨像

これが「表現」の特色ともな水

は結構です。

種目。

父藝のあらゆる研究。

感想。評論。詩。短歌。

俳句。父藝会通信。

各篇幾篇はて可。

メ切

次号原稿メ切は五月十五日。

社費 拾文。

以上。

表現人同人及讃同人。

讃同人。

南枝白眠
織内涼風
安藤幸宏
原健
松浦十方
石田修二
佐々木伸尾

同人。

河合雪雄
高木柳江
新妻寥
佐藤義家
馬場卯一郎
馬場卯一郎
佐藤義家

編輯兼発行人

昭和三年四月十五日発行

以上。

